

第39回

# 少年の主張大会

## 作文集



高浜市

高浜市教育委員会

「少年の主張大会」は今年で第39回を迎えます。本大会を通して、これからの高浜を明るく照らすような青少年の表情に触れることができ、大変うれしく思います。

新型コロナウイルスの感染拡大から2年以上が経過していますが、いまだ収束したとは言えない状況が続いており、本大会も令和2年度、3年度は新型コロナウイルスの影響で中止となりましたことは、残念でなりません。しかしながら今年度は、感染対策を講じたうえで、高浜の将来を担う少年たちが活躍する姿を知ることができる「少年の主張大会」を開催する運びとなりました。

本市が第6次総合計画において掲げてまいりました「大家族たかはま」には、家族のようにみんなで助け合って、問題を解決し、喜び・幸せをみんなで分かち合っていくという意味が込められています。少年たちが日ごろの生活の中で感じていることや考えていることを本大会を通して発表することで、社会性や自主性を育てるとともに、広く市民の皆様に少年たちの想いを知っていただく機会になればと思います。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたり、お力添えをいただきました皆様に深く感謝申し上げます。

高浜市長 吉岡 初浩

高浜市の少年の主張大会も第39回を迎えました。過去2年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となったことは誠に残念ですが、今年度は感染症対策を行いながらではありますが開催することができたことをうれしく思います。

自身の体験を通して社会を見つめ、その考えを社会に向けて発表し、自分の夢や希望に向かって歩む姿勢は、間違いなく新しい時代を生きる力にあふれた次世代を築くことにつながることでしょう。

そして子どもたちが考えていること、求めていることを私たち大人がしっかりと受け止め、地域全体で子どもたちの成長を支援していくことが必要ではないでしょうか。

最後になりましたが、子どもたちの豊かな成長にお力添えをいただいている皆様に感謝申し上げますと共に、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

高浜市教育委員会  
教育長 岡本 竜生



## **小学生の部**

☆お父さんからもらった夢	高浜小学校6年	今住 劉哉	……	2
☆あいさつでつながるまち	吉浜小学校6年	由良 水瀬	……	3
☆身近な障がい者	高取小学校6年	宮永 聡太	……	5
☆ボランティア活動をする理由	港小学校6年	杉浦 遙日	……	6
☆自分を超えて	翼小学校6年	洞地 海希	……	8

## **中学生の部**

☆「がんばって」の意味	高浜中学校3年	鈴木 豪	……	9
☆自分らしくいられる場所を	南中学校3年	永松 美洸	……	11

## **高校生の部**

☆助け合いとSBP	高浜高校3年	前田 蓮	……	12
-----------	--------	------	----	----

〔敬称略〕





## お父さんからもらった夢

高浜小学校6年 今住 劉哉

みなさんには夢がありますか。ぼくには大きくて、大切な夢があります。その夢とはサッカー選手になることです。

サッカー選手を目指すようになったのは、二年生の時にキリンチャレンジカップの日本対ニュージーランドの試合を見に行ったことで、選手たちに強いあこがれをもったからです。

初めて日本代表の試合を見て、高い技術とチームプレー、そして緊張感の中での真剣勝負に、ぼくは試合中ずっとわくわく、ドキドキしていました。サポーターたちも選手と同じくらい熱くなって、いっしょになって戦っているような感じがしました。

この試合をきっかけに、ぼくはサッカー選手になる夢をもち、お父さんとサッカーの練習を始めました。最初は十メートルくらい離れてパスの練習を始め、それから少しずつ距離を伸ばしていききました。PKやフリーキックの練習もしました。お父さんは遠いグラウンドまで連れていってくれて、長い時間、練習に付き合ってくれました。ぼくのそばにはいつもお父さんがいて、ぼくはいつまでもお父さんとサッカーをしたいと思いました。

ところが二年前、大好きなお父さんは、ぼくの前からとつぜん、病気でいなくなってしまうしました。ぼくは、つらくて、悲しくて、サッカーどころではなくなってしまうしました。しばらくは、ボールをさわることでもありませんでした。でも、サッカーを習っている友達の話を知ると、自分だってサッカーをやりたいのに、上手くなりたいたいの、と悔しい気持ちでいっぱいになりました。サッカーに夢中になっているころは、歳が上がるにつれて、夢は近づいてくると思っていたけれど、そのころは、自分から夢はどんどん遠ざかっていって、もう手の届かないところへ行ってしまったように思いました。思い通りにならない現実に、いらいらして家族にもつらくあたっていました。

夢をあきらめて一年後、ぼくはテレビでブラジルのネイマール選手のプレーを見ました。ネイマールは貧しい家庭に育ち、くつが買えなくて、はだしでサッカーをしていました。でも、今ではブラジルの至宝と呼ばれるほどの超一流のサッカー選手になっています。ネイマールのプレーを見ていて、二年生のときに感じた熱い思いがよみがえり、もう一度サッカーがやりたいという気持ちがわいてきました。そして、今が人生の底でも、いつか頂点に行ける時が必ず来ると信じて、努力してみようと思うようになりました。





まずは、だれかに教えてもらうのではなく、自分一人でもできる練習を考えて、公園で必死に練習しました。今では、サッカーがぼく的生活の中で大切なものの一つで、自分が自分と戦えるゆいいつのスポーツになりました。サッカー選手になるという夢の途中には、大きなかべがありました。でも、それを乗り越えられたとき、かべがなかったときの自分より大きく成長できると思いました。

大好きだったお父さんにもう会えないのはさびしいけれど、お父さんから教えてもらった全てのことを絶対に忘れないで、これからもいろいろなことに挑戦していこうと思います。ぼくはまだ十二年しか生きていないけど、ぼくの人生の先に、夢をあきらめないでよかったと思える日がいつか来ることを信じて、お父さんからもらった夢を、これからも大切に、努力を続けていきたいと思っています。

## あいさつでつながるまち

吉浜小学校6年 由良 水瀬

みなさんは、自分から進んであいさつをしていますか。また、あいさつをされたとき、きちんと返していますか。

私がいさつを心がけるようになったのは、三、四年生の頃です。学校で六年生が先手のあいさつをしてくれて、「すごいな、かっこいいな。」と思いました。それと同時に、「あいさつをしてもらってうれしいな。」と、温かい気持ちになりました。それまでの私は、恥ずかしくてなかなか自分からあいさつをすることはなく、されたら返すような感じでした。そんな私と六年生を比べて、自分が情けなく感じました。なぜなら、あいさつをされたらこんなにうれしいのに、私はそのうれしさを、他の人に分けることができていると気づいたからです。私は思いました。「あいさつでつながることは、こんなにもうれしいことなんだ。このうれしさをみんなに伝えることは、私にもできるはずだ。」

それから、私は学校で、先生や友達に自分からあいさつをするようになりました。すると、みんな笑顔で「おはよう。」と返してくれました。自分からあいさつすることができたうれしさだけでなく、あいさつを返してもらったことでも、とても温かい気持ちになりました。そして、私は、あいさつをするのが好きになりました。学校だけでなく、近所の方にもあいさつをするようにしました。

そして、いろいろな人とあいさつをすることができるようになって





た頃の帰り道。前から男の人が歩いてきました。私は、「あいさつをしよう！」と意気込んで、「こんにちは。」とあいさつを試してみました。しかし、男の人はだまって通り過ぎてしまいました。「声が聞こえなかったのかな。嫌だったのかな。返したくなかったのかな…。」いろいろと考えました。自分からあいさつができたことには満足しましたが、あいさつが返ってきたときの、あの温かい気持ちにはなれませんでした。

そんな体験があり、私は、「お互いが温かい気持ちになれるあいさつって何だろう。」と考えました。やはり、一方通行のあいさつでは、つながりは生まれません。あいさつをして、あいさつを返すことで、お互いがうれしい気持ちになります。そうすれば、笑顔がたくさんのおごしやすいまちになるのではないのでしょうか。しかし、「知らない人にあいさつをするのは変だ、恥ずかしい。」と思う人がいるかもしれない。そう感じる人たちに、あいさつでとてもうれしい気持ちになるんだよと伝えたいです。そのためにも、私は、知っている人だけでなく、通りかかる人にも、笑顔であいさつをしています。声が出ないときや、突然あいさつをされてびっくりしたときは、おじぎをするだけでもいいと思います。きっと、気持ちは伝わります。

あいさつは、人と人とのつながりをつくるきっかけになります。みんながこのまちで笑顔で暮らすためにも、とても大切なことだと思います。そして、先にあいさつをしてもらったら、笑顔で、元気に返したいです。そうすれば、あいさつをしてくれた人も、あいさつを返した自分も、きっと温かい気持ちになれると思います。その温かい気持ちが、また次のあいさつにつながっていくのではないのでしょうか。あいさつでつながる、笑顔いっぱいのおまちを、みんなでつくっていきましょう。





## 身近な障がい者

高取小学校6年 宮永 聡太

みなさんは、障がい者というと、どんな人だと思いますか。ぼくは障がい者と聞くと、いわゆる身体に障がいのある人、つまり、手足が不自由な人や、目や耳が不自由な人だと、何となく思っていました。

ですが、障がいには、知的な障がいや、精神の障がいがある人もいて、それぞれに今の社会では生きづらさを抱えて生きているようだということが少しずつ分かってきました。

ぼくのお母さんの実家には、おじいちゃん、おばあちゃん、そして、知的障がいのある「やっくん」というおじさんがくらしています。やっくんは、ぼくのお母さんの弟です。お母さんによれば、やっくんは今、三十五才ですが、自閉症という病気があって、知的な発達も遅れていて、二才くらいの知力だということです。会話もほとんどできません。時々、大きな声を出したり、怒ったりすることがあるので、ぼくが小さいときにお母さんの実家に行くと、「やっくんはこわいな」と、思うことがよくありました。しかし、何回か会ってやっくんにも慣れたこと、そして、ぼくも大きくなって心も成長したということもあって、やっくんをこわいと思うことはなくなりました。このごろは、コロナかということもあって、あまり直接会うことは少なくなりましたが、その代わりに、よくテレビ電話をしています。そのとき、お母さんは、よくやっくんに話しかけています。その顔はとてにこにこして、やっくんが大好きなことが伝わってきます。お母さんにとって、「やっくんは大切な家族の一員なんだな」と、最近思うようになりました。

お母さんが、「おばあちゃんもやっくんを育てるのに苦労があったみたいだよ。」と、言っていました。思春期に外で、大きな声を出したり、怒っておばあちゃん的眼鏡を曲げてしまったりして、大変な思いをしたようです。おばあちゃんは、やっくんを少し見て「かわいそうに」と、言われることが一番いやだったそうです。「やっくんも自分も何もかわいそうじゃない」と、思っていたそうです。

このごろ、盲導犬を連れて店に入ろうすると断られてしまったり、点ブロスマホということをしていて人とぶつかりそうになったりした視覚障がい者がいたということをニュースで知りました。点ブロスマホは、視覚障がい者が利用する点字ブロックの上で歩きスマホをすることです。そこで、国や県が、どんなことを障がい者に行っているのかを調べてみました。愛知県では、障がい福祉課という課が





あり、そこで手話やコミュニケーションの条例の推進などを行っています。また国は、国民全員が互いに支え合い、障がい者の自立と社会参加の支援を基に、障がい者の差別解消の政策をやっているようです。さらにくわしく調べると、「障がい者基本法」という法律があることを知りました。この法律の目的は、国民が障がいのありなし関係なく、人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現することです。国や県がこのようなことを続けていけば、障がい者がふつうの人と同じように社会に参加できるようになると思います。また、これからは、障がい者ももっと政治に参加できるようになれば、障がい者への差別もなくなっていくと思います。

ぼくたち家族は、やっくんとふつうに接しています。家族として接しています。なのに、社会に足をふみ入れると、障がいがあるだけで差別されることもあります。差別された人も、その家族も、みんな悲しみます。しかし、ふつうに接していると、障がい者も、そうではない人も、心地よくくませます。ぼくは障がいのありなし関係なしに接してほしいと思います。ぼくは、だれに対しても同じように接していきたいです。お互いに困っていたら助ける、そんな当たり前を、ぼくは障がい者との間に作りたいです。

## ボランティア活動をする理由

港小学校6年 杉浦 遙日

ぼくのおばあちゃんは、たく老所に来ている高れい者の人たちに食事を作るボランティアをしています。一か月に一回、出かけて行きます。メンバーは三人で、約三十人分の食事を作っています。

おばあちゃんにこのボランティアを始めたきっかけを聞いてみると、「人手が足りず、知り合いからさそわれたことと、地域の人たちとのふれ合いがしたかったので始めた」と言っていました。「給料はもらえないけれど、喜んでくれる人がいるから、やっていて楽しい。それから、料理が好きだから続けている」とも言っていました。もう二十年も続けているそうです。

ぼくは、大変そうなことをしているなどと思って聞いていました。代わりにやって来てと言われても、多分断ると思います。なぜかと言うと、給料がもらえないし、料理を作ったこともないので自信がないからです。一回くらいなら手伝ってもいいけれど、毎月は無理だと思いました。







では、なぜボランティア活動をする人がいるのかをインターネットで調べてみました。そこには、社会の役に立ちたいから、自分の成長のためになるから、困っている人を支援したいという気持ちから、などの理由から活動をする人が多いということが書かれてありました。

ぼくの小学校では、一年生が入学してきたころ、六年生が順番に一年生のお世話をしに行く、「お世話係」があります。毎年、六年生が一年生のお世話をしていることは知っていました。しかし、どんなことをするのか分からなかったし、初めてのことで少し不安でした。

ぼくの当番の日が来ました。少しドキドキしながら一年生の教室に友達といっしょに行きました。そこでは、ランドセル置き場の位置や名札の付け方、係の手伝いのやり方などを教えました。何度も一年生に教えるうちにお世話係の仕事にもなれ、楽しくなりました。

一年生もだいたい小学校生活になれてきたので、今はもうお世話をする期間は終わっています。しかし、ぼくは雨の日や時間のあるときには、一年生のクラスに行ってお世話を続けています。

ぼくは、ボランティア活動とは、人を助けたり困っている人のために何かをしたりするものだと思っていたけれど、本当は自分のため、自分の成長のためにしていることなのかなと思いました。

なぜかと言うと、お世話をしたクラスの先生や一年生の子から、「ありがとう」とお礼を言われたことがお世話係の仕事をして一番うれしかったからです。他にも、一年生の知り合いができたことや、当番をいっしょにやった友達ともっと仲良くなれたことも、よかったことの一つです。

また、人に教えると、その内容をもう一度おさらいをするため、そのことに対する理解がより深まり、ぼくにとって自信になっていくと思いました。ぼくは、多くの人の前でどうしても上手く話せない悩みがありますが、お世話係の経験で少しずつ自信をもてるようになったことから、ボランティア活動は、ぼくの悩みの解決にもつながっていると感じました。

これからぼくは、地域の活動や行事にも積極的に参加して、いろいろな話を聞いたり経験したりして自信をつけていきたいと思います。友達といっしょに参加できると、より楽しく活動ができると思うので、多くの友達をさそってボランティアの輪を広げていきたいです。





## 自分を超えて

翼小学校6年 洞地 海希

僕は、今まで、何気なく勉強して、何気なく運動する、そんな小学生でした。「悔しい」「負けられない」など、「自分が行く」「自力でやる」という考えをもったことはありませんでした。そんな僕をバージョンアップさせてくれたのが、今習っているバスケットボールです。

父が習っていたという理由で、小学三年生の終わる頃、「やってみないか」と声をかけられて始めました。その時はなんとなく始め、特に何も変わらないまま二年間が過ぎました。その頃から父は、僕のことを、ジャンプカもスピードもあるのに、生かし切れていない。もったいないと考えていたようです。しかし、僕はそれに気づきませんでした。そのまま練習を続け、A軍に入れないうまま、六年生になりました。バスケットボールのコーチからは、他の選手より、厳しい対応を受けることも増えました。「何回言えば分かるんだ」と言われ、意識はしていましたが、なかなかできませんでした。厳しい言葉を言われても、ただ「何で厳しいのだろう」としか思いませんでした。今考えれば、コーチや父、チームメイトも「海希はやればできるはずなのに、なんで頑張ろうとしないんだ」と思っていたのかもしれない。

僕は六年生になり、「このままでは、終われない」そう思いました。その瞬間、自分の中で何かが変わり始めました。強くなりたい、試合で活躍したいという気持ちが芽生えてきました。練習をいつもの二倍、三倍、やるときは五倍以上頑張るようになりました。練習中も本気で走り、本気でボールを取りにいきました。タイミングに合わせてゴールの近くに入る練習もしました。周りをよく見て判断することも意識しました。家にいる時には、父にどうしたらもっと自分のポジションで上手になれるかを聞きました。それらの努力がちゃんと実り、試合でも、だんだん活躍できるようになっていき、コーチやチームメイトに褒められることも増えてきました。それでもまだ満足はできませんでした。強いチームと戦えば、試合中に今のままではまだ通用しない。まだ何か足りない。まだまだ未熟だし、完璧なところなんてない。自分なりに頑張って、結果も出てきたはずなのに、自分に満足できなくなってきました。ドリブルを使って一人で攻めていったり、完璧なパスを出したり、ブロックが来ない時のシュートを全て入れたりたい。それだけではありません。今、自分が持っている隠れた能力があるなら、それを見つけ、習得





し、マスターしたい。簡単でないのは、分かっています。でも、今はバスケットボールを始めた時の自分ではありません。「自分から、自力でやってみたい。」心からそう思えるようになりました。

弱気で遠慮していた自分は、もういません。新しい自分になれた気がしました。最近では試合に出る回数も増え、両親から褒められる回数も増えました。だから、自分に自信をもてるようにもなりました。そして、昔の自分を超えて周りの人から、いい評価をもらえるようになりたいと思いました。大人になった時に、胸を張って堂々と生きていけるような人間を目指して、これからも今の自分を超えていけるように挑戦をし続けたいと思います。

## 「がんばって」の意味

高浜中学校3年 鈴木 豪

「豪、これから先どんなに辛いことがあるかはわからないけどがんばって。」

と家族から言われました。その時にはまだ僕は「がんばって」の意味が理解できていませんでした。その意味を知るのは、入院して手術を受けた後のことです。

病名は「小児良性脳腫瘍」。入院の見通しは三か月間。手術時間は十時間を超えました。手術は成功しましたが、左半身にマヒが残りました。その日から僕の当たり前だった日常が消えてしまいました。身体を動かすことができないICUのベッドの上、意識はあるのに声の一つも出すことができません。声にならない声が頭の中を駆けめぐりました。この先どうになってしまうのか。友だちとは会うことができなくなって、学校にも行けなくなってしまふのだろうか。不安と絶望の音がぐるぐる回っていました。

これから何をどうしたらよいのか分からなくなり、かろうじて動く右手でペンを握り、紙に書いてドクターに尋ねてみました。

「僕はこの先何をしたらいいですか。」

ドクターは

「リ・ハ・ビ・リ」

と一言ずつゆっくりと言いました。この言葉を聞いて、

「リハビリ。これで前のような生活ができて、学校に戻ることができるかもしれない。」

不安の声をかき消し、「リハビリ」の四文字が希望の光となりました。





それからリハビリに打ち込む日々が始まりました。特に人とコミュニケーションをとるのが好きな僕は、早く家族や友達と話したくて、言語トレーニングに一番力を入れました。いろいろな種類のリハビリを続けるのはとても大変でしたが、早く日常を取り戻したいという気持ちで一生懸命に続けました。どんなに苦手なものでも繰り返し続けた結果、少しずつ回復の兆しが見えてきました。手術から一か月ほど経った時、リハビリ専門の病院に転院しました。僕はゴールが見えてきたと思いました。しかしそれは簡単な道のりではありませんでした。リハビリの種類が減り、言語トレーニングを集中的にやるようになりました。早く以前のように話せるようにがんばっているつもりが、焦る気持ちとマヒのせいで、口が上手く動かずになかなか思うように話せません。そうして次第にリハビリへの取り組みがおろそかになってしまいました。

そんなときに母が穏やかに言いました。

「リハビリをあきらめたら元の豪は戻ってこないよ。」

この瞬間ふと、入院前の「がんばって」という言葉を思い出し、その意味をようやく理解することができました。それは最後まで諦めずがんばれば、努力は必ず報われるということ。そしてその言葉には、僕に対する愛情がたくさん込められていることに気付きました。どんなに励ましの声があっても、やるのは自分自身です。それから「絶対に負けない」「みんなの思いに応えたい」という強い気持ちをもつことができました。

こうして三か月間に及んだ入院が終わりました。まだマヒはありますが、手足がほぼ自由に動き、学校で友達と話したり、勉強したり、運動もほとんど不自由なくできています。

僕が病気に対して前向きになれたのはいつも明るく支えてくれた家族や病院の方、友だちの存在があったからだと思います。特に病気になった自分以上に僕のことを心配し、愛情を込めて励ましてくれた「がんばって」の言葉には「早く前のように元気になって欲しい」「豪ならやれる」という期待が込められていたのだと思います。僕はこの経験を通して、愛情のこもった言葉にはパワーがあることを知りました。今度は僕が周りの人にパワーを送る番です。今当たり前の生活ができることの素晴らしさを感じながら、周りの人達に愛情をもって接することができる人間になりたいです。





## 自分らしくいられる場所を

南中学校3年 永松 美光

中学三年生になり、学校では様々な上級学校からの案内や、学校紹介のパンフレットが配られるようになりました。

その中の、ある学校のパンフレットを見て私は衝撃を受けました。女子の制服にズボンがあったからです。

私服でズボンを履くことはよくあることです。しかし女子がスカートではなくズボンという制服に違和感を覚えました。

中学校では、制服に選択肢はありません。女子はスカート、男子はズボン。私の中ではこれが「当たり前」で「普通」だと思っていました。

そのとき、友人がスカートよりズボンがいいと話していたことを思い出しました。友人は、

「スカートはひらひらしていて苦手」

「風が吹いたとき、ふわっとスカートが上がるのが嫌」

他にも理由があるようですが、とにかくスカートが嫌なのだそうです。私もズボンのほうが動きやすいと思うので、その言葉に共感しました。

今、SNSを見るとジェンダーレス男子やジェンダーレス女子といったものが流行しています。

自分らしさを表現する方法として、服装の男だから、女だからという壁はなくなりつつあるのではないかと思います。

また、性同一性障害の問題もあると思います。性同一性障害とは、簡単に言うと心と体の性別が異なっている方のことを指す言葉です。

性同一性障害の方が日々、どんなことを思ったり、感じたりしているか調べてみると、

「自分の存在を否定されているようだ」「学校に行くのが嫌でしかたない」という声がありました。

服装を体の性別で強制されることに苦痛を感じている方もいるようです。

友人が話していた理由とは違いますが、服装に対して思うところがあるという点では同じだと思いました。

女性が、という話を中心にしてきましたが逆のパターンもあり、男性でもスカートを履きたいという方がいます。

私はまだ実際に見たことはありませんが、すでにスカートが男子の制服の選択肢にある学校もあるそうです。

障害、と言われると失礼かと思いますが、福祉的な観点から考え





ると、社会に受け入れられやすくする方法の一つと思いました。

こういった障害に過剰に反応して責めることは、明らかに人権侵害であり、差別です。女だから、男だからという常識の押しつけは誰かを苦しめ、生きにくい世の中を作る原因になっているのではないのでしょうか。

では、一人一人が生きやすい世の中にするにはどうしたらよいのでしょうか。

私は、悩みや自分の考えを誰もが言える、いわば、自分らしくいられる場所が必要だと思いました。

そのためには、「そんなこと」と思ってしまうような悩みでも、親身になって寄り添うことが大切だと思います。

私の学校では、制服に選択肢はありませんが、熱中症対策という理由で、体操服での登校や校内で過ごすことを認められています。自分でその日の体調や天候を考えて、どちらで登校するのか選んでいます。

選択肢があることで、自分がどうしたいかと主体的に考える機会が増えました。

最後に、一人一人が生きやすい世の中を作るのは私たちであり、逆に生きにくい世の中を作るのも私たちです。

私にできることはまだ少ないですが、まず身近な人の思いを「そうなんだ」と受け入れ認められるようになっていきたいです。

## 助け合いとSBP

愛知県立高浜高等学校3年 前田 蓮

「困ったらすぐに人に頼る。その分、誰かに頼られたら応じる。」  
僕が軸としている考え方です。これは、端的に言えば「助け合い」です。なぜ、僕の軸が「助け合い」なのか。そこには、2つの理由があります。

1つ目の理由は、幼い頃の経験があったからです。僕が小学校1年生ぐらいの頃、学校からの帰り道で、その出来事は起こりました。友達とふざけあってははずみで、持っていた防犯ブザーの留め具が外れてしまったのです。すぐに友達と一緒に探したのですが見つからず、友達が帰ってからは一人で探していました。この時の自分の、一人で探している孤独感。探しても出てこない焦り。そして防犯ブザーの大きな音がずっと鳴り続ける恐怖。幼い日の僕はそれら





に耐えきれず、泣いてしまいました。そんな時、偶然通りがかった高校生の方が助けてくれたのです。その高校生はとても冷静で、僕がいくら探しても見つからなかったことを告げると、公民館に連れて行ってくれました。その後のことははっきりとは覚えていませんが、とにかく無事に、公民館の方々のご協力もあり、鳴り響く防犯ブザーを止めることができたのです。今振り返ってみれば、あの頃の僕はとても小さなことで泣いていました。けれど何をすればよいかかわからず、たった一人で心細かったため、あの時の高校生の方には感謝してもしきれません。僕はこの経験から人に頼ることの大切さと、助けられた分、いつか自分も困っている人を助けられるようになりたいと思うようになったのです。

2つ目の理由は、一人でできることには必ず限界があると思うからです。この考え方に関わってくるのが、僕が今、所属している部活動です。高浜高校ボランティア部、SBP班。「SBP」とは「ソーシャル・ビジネス・プロジェクト」の頭文字なのですが、皆さんあまり聞きなじみのない言葉であることでしょう。簡単に説明しますと、「高校生が地域の課題に、地域の特色を生かして、解決に取り組む」という活動をしています。例えば僕たちの場合だと、高浜市の特産品である三州瓦の技術と、同じく高浜市の主要産業である、自動車部品メーカーの技術とを融合させたオリジナルデザインが可能なたい焼きの焼き型「Sの絆焼き型」の販売を行っています。その活動の一環で実際に焼き型を使い、出来上がった商品の販売を行うことがあります。出店準備を行う際には、中身のアンを、出店する時期や場所にできるだけ合う物を選びます。そしてそれをわかりやすく伝えるためのPOPを作り、出店の日に間に合うように、アンのみではなく生地を買います。さらに、当日必要な物をまとめて先に荷物を会場に置いておく必要もあります。出店をする前の準備段階だけでも、とても一人だけでこなせるようなものではありません。部員、メンバー以外にも顧問の先生や高浜市の市役所の方々がいなければ絶対にできないようなものです。実際に販売をする際には会計、商品を入れる人、商品を作る人等々、様々な役割があります。だから全ての役割の人たちが息を合わせられないと商品の伝達ミスが起き、お客様にご迷惑をかけてしまうのです。しっかりチームワークをとれるようにしなければいけません。

このように僕の所属しているSBPは、一人でこなすというよりも全員が協力して物事を解決し、進めることがほとんどです。だから僕は、一人でできることには必ず限界があると思っています。

以上の2つの理由から僕は「助け合い」を軸としています。僕はこれからもSBPでの活動を通じて助け合いの精神を大切にし、そしていつか僕を助けてくれたあの時の高校生のように、困っている人を助けられる、頼りにされる高校生でありたいです。





あとがき

この冊子は、各校から送られてきた少年の主張作文原稿をもとに作成しました。大会の開催に向けてご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

発行 令和4年6月

発行者 高浜市青木町四丁目1番地2

高浜市・高浜市教育委員会





思いやり 支え合い  
手と手をつなぐ  
大家族たかはま

